高齢者宅に大学生同居・府の次世代型下宿

ほどよい距離 支え合い実感

母介護に行き詰まり…／外出自粛で通学できず

「1人でない」どれだけ心強いか

高齢者が自宅の空き部屋を大学生に貸して同居する次世代型下宿「京都ソリデール」事業が京都府内で行われている。ほどよい距離感で、実母の介護と死去、新型コロナウイルス感染拡大など、さまざまな局面で支え合ってきた家主と大学院生を取材した。（鈴木雅人）

事業は、京都府が2016年度から始め、家主と大学生をマッチングしている。高齢者世帯にとって若者との同居が安心感につながる一方、大学生は安価な家賃で居住できる。現在までに延べ36組が成立した。

京都市上京区の岩井一枝さん(64)夫妻は昨年7月から、同志社大大学院修士2年の藤本慎介さん（23）と同居している。

食事は別々。玄関も別。一枝さんは最初に「お互いの生活優先で。気を遣い合うのはやめよう」と伝えた。研究などで深夜帰宅の多い藤本さんにとってもありがたかった。思いやりながら、干渉しすぎない。ただ、さりげない気遣いも忘れない。外食や総菜中心なのを見かね、一枝さんがカボチャや豆の煮付けを差し入れることもある。

大丈夫ですか

つかず離れずの距離を保っていたある日、一枝さんは行き場のない気持ちを藤本さんに受け止めてもらう。夫妻宅には、認知症があり、自力で歩けず要介護度の重い一枝さんの実母も同居していた。一枝さんは毎朝5時に起きて母のおむつを替え、朝食を作り、デイサービスに送り出してから出勤。「一人娘だから」と介護を全て背負っていた。

京都ソリデール事業で同居する（写真右から）藤本慎介さんと岩井一枝さん、時栄さん夫妻＝京都市上京区、藤本さん提供

ただ、覚悟の重さにつぶされそうなときもあり、深夜に母が突然大きな声を出し、つい怒鳴り返したこともあった。落ち着いた頃、藤本さんに「大丈夫ですか?」と声を掛けられた。「手伝いに行くべきかどうか、迷いました」とも。

一枝さんは「介護を手伝ってほしいわけではない。でも『誰かが気に掛け、分かってくれている』と安心できた。身内だとかえって甘えすぎてしまうのかもしれない」という。

今年2月に母を自宅でみとり、弔問客が帰った深夜、つぎの前で藤本さんと2人きりになった。母が90年間の生をどう歩んだか、自分がどんな思いを寄せていたか。話し始めたら止まらず、母が生前に自分の人生をつづった本まで持ち出した。

一枝さんの喪失感に、藤本さんは「母を見送ることに一枝さんが専念できるように、心掛けて寄り添おうとした」。葬儀業者に一枝さんの息子と間違われたが、訂正はせず、そのままお供えなどの準備に引ついて説明を受け、配膳もき受けた。

物理的な近さ

同居は続いたが、藤本さんは新型コロナによる混乱に巻き込まれた。前期の授業がオンラインとなって大学に通えず、生活を支える授業補助のアルバイト収入も絶たれている。就職活動はオンライン中心となり、勝手の違いに戸惑う。不安が募る。同じ境遇にある一人暮らしの友人は、電話のたびに「さみしい」とつぶやいている。

部屋にいて、ふと思う。「安心できる人の存在を感じることが、どれだけ心強いか」。一枝さんが部屋に顔を出し、手作りのみたらし団子などを差し入れしてくれる。一人ではない。外出自粛が続き、人と人の距離が物理的に遠くなったからこそ、心のつながりを温かく感じる。

もう一つ、気付かされたことがあるという。この半年間で、大切な人を失うのを間近で見たり、外に出られなくなったりした。「いつもの日常が続いていくことこそが幸福なんですね」

２０２０年５月２１日　京都新聞掲載

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます